

⑤メイプルの実践記録

ア. 本年度の取り組み

「食」をテーマに、1学期はニンニクをはじめとした野菜の栽培とそれらを使った調理を行い、2学期からは「味噌汁」を材に、出汁や味噌の組み合わせや、調理方法を考えた。3学期では、味噌汁をお世話になった方たちの飲んでもらい、振る舞う喜びや達成感に結実させる流れで単元の学習を行った。



1学期では夏野菜を育て、作物の収穫や調理を通して食への関心を高める活動を行った。また、昨年度から植えていたニンニクを使って、作ってみたい料理を考え実際に調理を行った。食づくりの楽しさを味わうとともに、一連の流れをすべて自分たちで行ってきたことによる達成感を実感し、生活に必要な力や他者と協働する力の基礎を育んだ。児童は、作ってみたいものや、やってみたいことが活動に反映されることから、モチベーション高く活動に参加し、これが2学期に行う味噌汁作りでの主体的な活動にも生かされた。



2学期は、児童主体の探究的な学びを重視しながら、「味噌汁作り」の活動を中心に総合的な学習の時間を構想した。まず、野菜の栽培経験を生かし、自分たちで育てた作物や旬の食材に触れることで、食への関心や親しみを持つことからスタートする。

出汁や味噌、具材の組み合わせを段階的に比べて体験し、それぞれの味や特徴を整理する活動では、五感を生かして違いやうま味を発見する姿が見られた。みんなで試食会を開き、友達や家族、ゲストにふるまう計画を立てることで、実生活との結びつきや、おもてなし・感謝の気持ちを形に表す経験へと発展した。

また児童は、自分で作りたいオリジナル味噌汁を構想した。乾物など身近なスーパーで購入できる具材を調べ、予算の範囲で買い物リストを作成したり、実際に買い物に行ったりした。「もっと美味しい味噌汁を作りたい」という本気の課題を自分たちで設定し、みんなで意見を出し合っってレシピを考えることで、協力したり話し合ったりする力が高まっていった。

保護者へふるまう当日には、6年生が中心となり、自分たちのレシピや具材の工夫、出汁の選定理由をわかりやすく説明したり、ゲストへの配膳を分担して進行する場面を設定したりしながら、主体的に活動してもらった。実際に味噌汁を食べてもらい、ゲストから感想をもらうことで、児童は達成感や自信、次への意欲を感じることができた。活動の振り返りでは、自分の気付きや学び、工夫したことをワークシートや発表、掲示などさまざまな方法でまとめ、他者と共有することも大切にされた。多様な表現

活動を通して、児童一人ひとりが自分の思いや発見を伝え合い、友達の考えや感じ方にも関心を持つようになった。こうした体験的で協働的な活動により、「本気の課題」と向き合いながら未来を『そうぞう』する力や、実生活に根差した確かな学力の育成につながる2学期となった。



3学期は、普段の授業や今までの活動でお世話になった方々を招待し、児童がクラスみんなで協力して考えた「最高の味噌汁」をふるまう活動に取り組む。これまでに学んだ味噌汁づくりの技術や、お買い物体験、具材の工夫などを生かし、来てくれた方と一緒に、食べる喜びや感謝の気持ちを分かち合う機会とする。児童は自分の役割や工夫を発表し、感想や意見を伝え合うことで、協力する大切さや人とのつながりも実感する。体験を通して自信や達成感をさらに高めていく活動にしたい。

イ. 実践しての成果 (○) と課題 (●)

【児童】

- 身近な食の味噌汁を題材にし、目で見て・手で触り・においを感じ・舌で味わうという体験的な活動はメイプル学級の児童の発達に合致しており、意欲的に活動することができた。
- 異学年が在籍するメイプル学級において、味噌汁を協力して作ることは、協力して活動する必要感が生まれる、発達にも合致した題材であった。
- 実際に味見する・食べることで味を感じ、その感動を「もっとしたい」そして「おうちに人にも披露したい」「ゲストにも喜んでもらいたい」と自然な流れで学習を進められ、表現にもつなげることができた。
- 「味噌汁に入れる○○を作りたい!」と目的意識をもって栽培活動ができた。栽培を目的にするのではなく、作りたいものがあって栽培をするという見通しをもった活動ができた。

【教師】

- 出汁や具材の組み合わせを考える活動に広げることができたのは、味噌汁の教材としての特性である。次年度以降も味噌づくりや豆腐作りなどに活動を広げることができる教材である。
- 生活単元学習に位置付けている「お買い物学習」や「野菜の栽培」や、理科での「干柿づくり」等と関連付けて、横断的に学習を進めることができた。
- 実践した感想や、考えを表現することが苦手な児童への手立てを個別に考える必要がありそうだった。
- 畑での学習では、児童が栽培したい野菜や害虫対策など主体的に考える余地がまだありそうだった。しかし、調べる時間の確保やモチベーションの維持が難しいと感じた。
- 特に畑については、地域のゲストティーチャーを呼び、専門的な知識や助言をいただけるようにしたかった。

ウ. 来年度のに向けて

- ・畑について、地域のゲストティーチャー等呼び、専門的な知識や助言をいただけるようにする。
- ・児童の興味関心や、「やりたい!」というモチベーションを何よりも大事にする。